

中世日本の

海運の要、 越前の湊



戦 国時代、人や物が頻繁に行き交い、軍事的にも経済的にも重要な拠点であった湊。当時、湊を統治下に置くことは、その経済力や物流機能を手に入れることを意味しました。越前では、三国湊と敦賀湊が海運の要港として古くから知られています。

三国湊は、室町時代末期頃に成立したとされる日本最古の海商法規『廻船式目』に、日本の十大港湾「三津七湊」のひとつとして挙げられており、日本有数の湊として栄えていました。天文20（1551）年には、明の船も入港したと伝わっています（『朝倉始末記』）。また、三国湊は、越前の最大の



「越前三国湊風景之図」慶応元（1865）年（みくに龍翔館蔵）幕末期の三国湊を九頭竜川左岸側から俯瞰した風景図。多くの寺社とともに、川に沿って蔵と帆船がびっしりと描きこまれ、この頃の繁栄の様子が伝わってきます。

河川である九頭竜川の河口に位置し、日本海沿岸各地と越前国内を結びつける重要な役割を果たしていました。朝倉治政下の朝倉義景の頃には、家臣中最有力の国人、堀江景実が三国湊の統治に当たつ

ています。

天正元（1573）年、織田信長が越前に侵攻。朝倉氏は滅ぼされます。翌2（1574）年に、当時の三国湊をうかがい知ることができると文書が発出されています。文書は、信長が足羽郡北庄の橋屋に対して、唐物（中国大陸からの渡来品）や絹織物を商う座（同業組合）を三国湊に置くことを認め、税として絹一疋を徴収する特権を与えるものです（『橋栄一郎家文書』）。当時、三国湊の商業が盛んだったことがわかります。

一方、敦賀湊は、古代・中世から中国大陸との交易地であり、また越前以北の日本海沿岸地域と京阪地域を結ぶ中継港として非常に重要な位置を占めていました。各地から敦賀湊まで運ばれた荷は、陸揚げされ、馬で琵琶湖北岸の海津（滋賀県）まで運び、そこから大津（滋賀県）まで船で湖上を行き、大津から京までは再び馬で運ばれたのです。

朝倉氏は、この敦賀に郡司を置き、この地を掌握。代々、朝倉宗滴など朝倉総大将を務める重鎮に守備させました。豊臣秀吉による全国統一後は、更なる発展の契機が訪れます。秀吉によって敦賀湊は物流基地化されたのです。応仁の乱以降荒廃した

京都の再建や秀吉の大坂・伏見城の建築のため、敦賀に資材を陸揚げし、琵琶湖を経由して京・大坂へと運んだのです。また、商人は日本海沿岸の諸藩と関係を結び、蔵宿として年貢米の輸送を行い、豪商に成長する者も現れるなど、敦賀湊は、上方と北国との間を結ぶ中継商業都市として発展していったのです。

中世日本の海運の要であった三国湊と敦賀湊。江戸時代には北前船の寄港地となり、全国的流通拠点として、さらに大きな飛躍を遂げていくこととなります。

関連史料・ゆかりの地

湊之城址



南北朝期、新田義貞の重臣（新田四天王の一人）、畑六郎左衛門時能が築城した湊之城。かつて天台宗寺院千手寺があったところであり、千手寺城ともいいます。戦闘に備え寺を城塞化したといわれており、戦国時代には、朝倉氏の支城として、家臣の桜井新左衛門が居城したと伝わっています。

【住所】坂井市三国町山王2丁目（えちぜん鉄道 三国駅から徒歩 15分）

柴田勝家の

亡霊は、

北庄創成の神



柴田勝家肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

現 在の福井城址の南500mに位置するもう一つの城跡、北庄城址。ここを居城とし、主君、織田信長の安土城と並ぶ豪壮大な城郭、北庄城を築いた武将が柴田勝家です。

勝家は、信長の有力な家臣として知られ、越前国を治めた人物です。信長の妹、お市と結婚しますが、賤ヶ岳の戦いで羽柴秀吉に敗れ、天正11(1583)年4月24日、北庄城に火を放ち、お市とともに自害。壮麗な城は灰燼に帰しました。

勝家の命日に関し、いつ頃からか、

こんな伝説が語り継がれるようになりました。毎年、4月24日の夜になると、北庄城本丸跡周辺から福井市内を流れる足羽川に架かる九十九橋にかけて、首無し武者の一隊が行進したといのです。数百騎ものひづめの音がし、翌朝になると、決まって城下に数人の死者が出たといいます。いずれも口から少し血を吐き、まったく死因のわからない、いわゆる変死・怪死の類だったと伝えられています。勝家家臣団亡霊の行列と信じた福井城下の人々は、命日には、夕刻以降、町中全て戸締まりをして、誰も外に出なかったとのことでした。

この伝説は、勝家が崇霊として認知され、畏怖されていたことを示すものではないでしょうか。勝家は、かつての国主、朝倉氏とその家臣団を滅ぼしたほか、北陸道総鎮守の気比神宮を焼き払い、出家衆のほとんどを滅亡させるなど、恐怖の所業を重ねてきました。人々は、死後も畏怖の存在として、鎮魂の願いを持ち続けていたのでしょう。

日本には、スサノオノミコトの祇園信仰や菅原道真の天神信仰など、崇霊の霊を鎮め奉ることによって幸福を願う信仰が古くからあります。勝家もまた、その霊を鎮めようと北庄城址に現在の柴田神社の前身が建立され、祀られたのです。



柴田神社

一方で、伝説の首なし武者行列の正体は、実は、柴田家の旧臣であったという言伝えもあります。旧臣は、

普段は領民として城下に暮らし、お家再興の決意を新たにすため、毎年、甲冑姿で騎乗し行進し、その際の黒い覆面が首なしの正体だったというのです。

伝説とともに語り継がれる猛将、柴田勝家。今でも、北庄創成の神として、崇められています。

関連史料・ゆかりの地

北の庄城址・柴田公園



北庄城の遺構の上に整備された北の庄城址・柴田公園。園内には、柴田勝家、お市の銅像のほか、勝家の子孫であると言われる日本画家、平山郁夫氏揮毫による記念碑も設置されています。隣地には、勝家、お市を合祀する柴田神社が整備されています。

【住所】 福井市中央1-21-19
(JR 福井駅より徒歩7分)

治政に長けた 智将でもあった 猛将・柴田勝家



後の天下人、羽柴（豊臣）秀吉を悩まし抜いて、潔く散っていった悲劇の猛将、柴田勝家。当時日本に滞在していた宣教師ルイス・フロイスは、その最期を「信長の時代に日本にあった最も勇猛な大将・果敢な人が灰に帰した」と著書『日本史』に記しています。その勝家が拠点を置いた越前での治政はどのようなものだったのでしょうか。



柴田勝家肖像（柴田勝次郎氏蔵 福井市立郷土歴史博物館寄託）

勝家は、織田信長の重臣で、天正元（1573）年の浅井・朝倉攻め、同3（1575）年の越前一向一揆討伐で戦功をあげて越前北庄（北のしょう）を与えられ、ここを拠点として加賀の一向一揆の平定や北陸道の支配を行っていきました。天正4（1576）年には、北庄城の建築に着手し、一大都市の構築に取り組んでいます。勝家の関係史料は乏しく、一次史料と呼べるものは限られますが、数少ない諸文書を紐解くと猛将、勝家の意外な一面が見えてきます。勝家は、城下町建設に当たって、滅ぼした朝倉氏の拠点であった一乗谷より職人や商人を移住させ、また、民政では協力する社寺領の安堵や有力商

人の特権を認め、足羽川に九十九橋を架けたり刀狩を行ったりもします。さらに、「北庄法度」を発し城下の治安を維持したほか、農民へは掟書を発して農耕に専念するよう命じ、一向一揆による荒廃した農村の復興を講じました。勝家の城主としての仕事は極めて精力的で、治政に長けた智将としての面をうかがい知ることができます。

天正9（1581）年、フロイスが北庄を訪れています。フロイスは勝家と面会し、勝家は越前の半分、加賀全土の王のような存在で、当地の権限は信長的那样であったと記しています。一大拠点の整備の次は、天下をも狙える位置につけていたのかもしれない。

しかし、本能寺の変後、明智光秀討伐で遅れをとります。勝家は上杉氏と対峙しており、信長の死を知るのが遅れたのです。このため光秀討伐に馳せ参上できず、織田家の後継者を定める清須会議では秀吉に主導権を握られました。その後も覇権を秀吉と争いますが、天正11（1583）年、賤ヶ岳の戦いで敗走して北庄城に帰り、妻お市や家臣らとともに自害することになります。

精力的に都市整備を進めた名将、勝家。実は、勝家の出た柴田土佐守家は、系譜類によると、かつての越前守護斯波氏の支流とされ、織田家とともに越前に遠祖を持つ縁があったようです。自分のルーツの地、越前の国主となり、北庄に安土と並ぶ繁栄した都市を築いたのです。勝家が城下で進めた治政は、現在の福井市の繁栄の礎となっています。

関連史料・ゆかりの地

柴田勝家像

（柴田神社境内 雨田公平作）



柴田勝家・お市を主祭神とする柴田神社。北庄城跡に鎮座しています。もと福井藩土杉田家の邸内社として祀られていました。境内に隣接する城跡公園内には、資料館もあります。

【住所】福井市中央1-21-17 (JR福井駅より徒歩7分)

越前支配の拠点

きたのしょうじょう

北庄城と半石半木の

奇橋・九十九橋



柴 田勝家が築城した北庄城は、
長配下の武将として北陸方面に侵攻
する上で重要な拠点となりました。

天正3（1575）年に信長は、
越前の一向一揆勢を鎮圧して越前を
平定し、同年9月2日に坂井郡の豊



北庄城の石垣
(北の庄城址・柴田公園)

原寺から北庄に入ると、自ら城の縄張りをし、ここに城を築くように命じました（『信長公記』）。北庄は足羽川と北陸道が交わる水陸交通の便利な場所にあり、戦国期には町場として発達していたので、信長もこの地を選んだのでしよう。

この信長から越前国内の8郡を与えられた勝家は、北庄城主として城と城下町の建設に取り組みます。しかし、城の工事（普請）に必要な人足を領民から一方的に徴発してはいけません。できる限り村で耕作に従事できる措置を講じたのです。

同9（1581）年にイエズス会宣教師のルイス・フロイスが北庄を訪問した際のことを、次のように手

紙に書いています（「ルイス・フロイス書簡」より）。

「我等は市の入口の橋を通ったが、（中略）勢多橋と同じ長さで、当市は又安土の二倍あるといふことである。（中略）此城は甚だ立派で、今大きな工事をして居り、予が城内に進みながら見て最も喜んだのは、城及び他の家の屋根が悉く立派な石で葺いてあって、其色に依り一層城の美観を増したことである。」

最初にフロイスが城下の入口で渡った橋とは、足羽川に架かる九十九橋（大橋・米橋などの呼称もあり）のことを指しています。日本三大名橋として知られた「勢多橋」（瀬田唐橋。滋賀県大津市の瀬田川に架かる。）と同じ長さがあると記されていますが、実際は九十九橋の方が短かったようです。この橋は朝倉時代から架かっていましたが、勝家の時代には、愛宕山（現在の足羽山）で産出する笏谷石（凝灰岩）を利用して、石橋と木橋からなる半石半木の構造となっていたようです。

フロイスは、北庄の町は安土の2倍の規模があり、北庄城も大きな城であったことを綴っており、フロイスがやって来た時もまだ城の工事が続いていた。また、城や武家屋敷の屋根が「立派な石」で葺いてあ

ると記されていますが、それは笏谷石の石瓦のことで、この石の持つ独特の青緑の色が、城の美観を高めています。

現在、勝家時代の北庄城を描いた絵図（図面）は発見されていないため、その規模や構造はよくわかっていませんが、同13（1585）年に勝家の最期について書いた羽柴秀吉の書状（「毛利家文書」）には、北庄城は「天主を九重二上候」とあり、高層の天守が築かれていたようです。北庄城、九十九橋とも当時としてはスケールが大きかったようで、勝家の勢力の大きさをうかがうことができます。

関連史料・ゆかりの地

九十九橋



足羽川に架かる九十九橋は、明治42（1909）年に木造トラスに架け替えられるまで、半石半木の構造をしていました。昭和61（1986）年に完成した現在の橋は、九十九橋の歴史を感じさせながらも、現代的都市の景観に合うようなデザインになっています。

【住所】福井市照手1丁目からつくも1丁目（JR福井駅より徒歩15分）

きたのしょうじょう

北庄城の落城

柴田勝家らにまつわる

数々の悲劇

賤ケ岳の戦いで羽柴秀吉軍に敗れた柴田勝家は北庄に敗走し

ます。勝家の妻、お市とともに北庄城で自害したことは有名ですが、落城の際、実はその他にも、勝家と関係する人物にまつわる悲劇が起っていました。

そのひとつは、お市と前夫、浅井長政との間の娘である三姉妹（茶々・初・江）にまつわるエピソード



三姉妹の像
(北の庄城址・柴田公園内)

ドです。秀吉軍が城を囲んだ夜、勝家はお市と三姉妹に別れを告げようとすると、お市は「自分が城を出ることは思いもよらないが、三人の息女は城から出して父（長政）を弔ってもらいたい」と言い、勝家はその旨を三人に言い聞かせます。長女の茶々はそれを拒否し、母上と同じ道をいきたいと悲しんだものの、それは聞き入れられることなく三人を城から出したと伝わっています（『太閤記』）。また、勝家は三人を秀吉の陣所に送る際、三姉妹は長政の子で、信長公の血縁でもあるのでよろしく取り計らうようにとの手紙を書き添えると、秀吉も「決して疎かにしないので安心せよ」と返事したといわれています（『賤獄合戦記』）。しかし、

その後、三姉妹はそれぞれ運命に翻弄されながら戦国乱世を生き抜いていくこととなります。

勝家は北庄城落城の直前に三姉妹を城の外へ逃れさせていますが、実は、勝家が城から逃した女性ほ他にもいました。勝家の姉、末森の方とその息女です。

勝家は家臣の上村六左衛門に彼女らの行方を頼み、竹田（現在の坂井市丸岡町）の山里まで逃げ落ちたといっています。竹田ではある草庵に隠れていましたが、北庄城の天守閣に火がかかり黒煙があがっているのを見ると、落城を察し、六左衛門は末森の方に覚悟を迫りました。彼女はそばにあった硯を引き寄せ「今ここに六十路あまりの日の数を ただ一時にかへしぬるかな」と詠むと、娘も「思ひきや 竹田の里の草の露 母上ともに消えんものとは」と辞世の句を詠み、六左衛門が介錯をして二人は果てたといっています（『太閤記』）。

その後、六左衛門は母子の亡骸とともに草庵に火をかけると、彼自身も腹を切り火中に身を投じたといわれています。彼はもともと北庄城で勝家とともに最期を迎える覚悟でしたが、勝家の命を受け、北庄城を離れた山里で、主君の身内の女性たち

を黄泉路にしかと送りました。彼は主君・勝家への忠義を最期まで尽くし死んでいったのです。

別れの悲しみ、自決の無念、主君への忠誠……。北庄城の落城には、様々な人物のそれぞれの思いが交錯しているのです。



柴田勝家肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

関連史料・ゆかりの地

北の庄城址資料館



北の庄城址・柴田公園の一角にあり、柴田勝家が残した功績を紹介しているほか、北庄城に関する遺物や史料も展示されています。

【住所】福井市中央1丁目21-17（JR福井駅より徒歩7分）

生存説が残る

絶世の美女、

お市



浅井長政室 [織田氏] 画像 (東京大学史料編纂所蔵模写)

戦 国時代きつての美人として、また、運命に翻弄された悲劇のヒロインとして知られるお市。実は、彼女の生存説が伝わっています。

お市は、天文16(1547)年に織田信長の妹として、尾張国に生まれました。実家の織田家は、越前国、織田庄(現在の丹生郡越前町織田)にある劔神社の神官だったといわれ、その後、室町幕府の有力者、斯波氏の家臣として尾張の守護代を務めるようになり、信長の代に至りました。お市は、信長の命で、永禄10(1567)年、近江(滋賀県)

の国と深い縁で結ばれ、次女の初が後の小浜城主、京極高次に嫁いだほか、三女の江と將軍徳川秀忠の娘、勝姫は福井藩第2代藩主松平忠直に嫁ぎました。

お市には生存説があります。北庄城が落城する前夜、お市は、城の裏手を流れていた足羽川から脱出し、勝久寺(現在の坂井市三国町)に落ち延び、寺の離れに潜伏した後、三國湊の豪商、森田家に匿われたというのです。森田家は、信長の支援者で、織田家を財政面から支えた商人の一人でした。その後、森田家内の旧浅井家家臣の手引きで、お市は近江の国に移ります。さらに、同じく浅井家の残党の浅井治郎左衛門の案内により、伊賀の下友田に移り住み、慶長4(1599)年に53歳で没します。浅井治郎左衛門はお市の死後、茶毘にふされたお市の喉仏を保管し続けたということで、その喉仏が現在も、三重県伊賀市の浅井長政供養塔に納められているというのです。

この生存説が生まれた背景について、「それからお市の方―北ノ庄落城異聞」の作者、中島道子氏は、秀吉の目を恐れて、闇から闇へ生きざり続けたのは、浅井の遺臣ではない

の小谷城主浅井長政に嫁ぎ、三人の娘(茶々、初、江)をもうけます。

信長の越前攻めに端を発した戦いで、長政と死別した後は、柴田勝家と再婚しますが、勝家が羽柴秀吉に攻められ、天正11(1583)年4月24日、越前北庄城で自害します。37歳でした。お市の辞世の句は「さらぬだに打ちぬる程も夏の世の別れを誘う時鳥かな(時鳥はあの世からの鳥というけれど、そうでなくても寝ているはずの夏の世に、この世からの別れを告げているようだ。)」と伝えられています。お市は、その死後も、越前・若狭

かと述べています。浅井の残党は、結束を維持し続けていくため、お市という存在を必要とし、生存説を作り上げたのかもしれない。

関連史料・ゆかりの地

西光寺



柴田勝家の菩提寺、西光寺。境内には、勝家とお市の墓があります。秀吉軍に攻められ、北庄城で命を絶つに先立ち、3人の姉妹の将来などを住職に託したと伝えられています。勝家の書や刀剣などを展示する柴田勝家公資料館があります。

【住所】福井市左内町8-21 (JR 福井駅西口から福井鉄道乗車、足羽山公園口下車徒歩3分)

天下分け目の

清洲会議

お市の内に秘めた決意



織 田信長の妹、お市の三姉妹の末娘、江の生涯を描いたNHK大河ドラマ「江〜姫たちの戦国」。

その第7話で取り上げられた「清洲会議」は、信長死後の家臣の命運を決めた歴史の転換点として知



お市の方像 柴田勝家の像
(北の庄城址・柴田公園)

られています。その時、お市が内に秘めていた思いはどのようなものだったのでしょうか。

天正10（1582）年6月2日の本能寺の変を受け、信長を討つた明智光秀を羽柴秀吉が討ち取りました。その後、織田家筆頭家老の柴田勝家（越前北庄城主）ら諸将は、同年6月27日、尾張の清洲城で、信長の正統な後継者と遺領配分を決める会議（いわゆる「清洲会議」）を開きます。

会議には、勝家、秀吉のほか、丹羽長秀、池田恒興が出席。信長の後継者として、信長の三男、織田信孝を押す勝家と、信長の嫡子、織田信忠の子の三法師（当時3歳）

を押す秀吉が対立しました。秀吉の方が根回しが早く、秀吉が主張する筋目論に丹羽・池田が賛成。三法師が家督を継ぎ、秀吉が主導権を握ることになります。そして、もう一つ、この会議のとき、お市の人生を左右する重要なことが決まります。お市が勝家のもとに嫁ぐことになったのです。

なぜ、この時、縁組が決まったのでしょうか。勝家が堀秀政に宛てた書状によると、秀吉と申し合わせ：縁辺の儀（お市との結婚）が決まりそうだとあり、秀吉が会議での勝家の不満を抑えるため、勝家のお市への気持ちを含んで動いたという説があります。

しかし、お市の本心はどうだったのでしょうか。一説には、秀吉が最初の夫、浅井長政を自刃に追い込んだことなどから、お市は秀吉を相当嫌っており、勝家を選んだと言われています。

一方で、織田家存続のため、秀吉に対抗する実力がある勝家（そして、手を組む信長の三男、信孝）に賭ける、そんな内に秘めた決意をもって嫁いだという説もあります。勝家の妻となった直後の天正10（1582）年9月11日、お市は勝家とともに、京都の妙心寺で信長の百か日法要を行いました。これは、

自分が信長の死を弔う喪主たる資格のあるものと天下に公表したことを意味します。まさに、お市の決意の表れといえるかもしれません。

法要の翌月、宣教師のルイス・フロイス（後に「日本史」を執筆）は、信長の後継者はまだ決まっていな」と記しています。清洲会議で決まった後継者は名目上のことで、争いは続いていたのです。兄、信長のもと戦国の世を生きてきたお市。本当の覇権を争う「戦」は、清洲会議の後に始まることを冷静に見抜いていたのかもしれない。

関連史料・ゆかりの地

清洲古城跡公園



織田信長の天下取りの出発点であり、また清洲会議が開催されたことで知られる清洲城。慶長18（1613）年、名古屋城の完成と城下町の移転が完了し廃城されました。公園には復元された本丸石垣があるほか、五条川を隔てた対岸には再整備された「清洲城天守閣」があります。

【住所】愛知県清須市清洲古城448番地（名鉄「新清洲」駅下車徒歩20分）

参考資料等 『人物日本の女性史4 一戦国乱世に生きる―（お市の方）集英社 『福井県史』通史編3 近世― 福井県

細やかな心遣いと

思いやりを持つ、

優しい女性、初



初肖像 (常高寺蔵)

戦 国の世から江戸時代へ波乱万
丈の人生を送った女性。豊臣
側 (姉・茶々) と徳川側 (妹・江)
の橋渡し役として知られる浅井三姉
妹の次女、初 (常高院) とはどんな
人物だったのでしょうか。

初は、元亀元 (1570) 年 (諸
説あり)、浅井長政とお市の間に三
姉妹の次女として生まれます。天正
元 (1573) 年、小谷城が織田
信長に攻められ、長政は自刃。市と
三姉妹は、家臣の藤掛永勝によって
織田家の庇護を受けることになりま
すが、その信長も天正10 (1582)

年に本能寺の変で討たれます。その
年、お市は柴田勝家と再婚し、三姉
妹とともに越前北庄城に入ります
が、そのわずか1年後、勝家は賤ヶ
岳の戦いで羽柴秀吉に敗れ、お市と
ともに自害。三姉妹は、今度は秀吉
に引き取られたのでした。

天正15 (1587) 年、秀吉の計
らいで、初は従兄に当たる近江の大
溝城主、京極高次に輿入れしまし
た。高次は、慶長5 (1600) 年
の関ヶ原の戦いで徳川側につき、大
津城籠城により西軍 (石田側) の足
止めをしたことが認められ、若狭国

8万5千石を拝領します。実は、こ
の成功の裏には初の支えがあり、籠
城の際、兵のために侍女に鉄砲の弾
を作らせ、侍女とともに水を汲み、
飯を炊いたと伝わっています。

若狭小浜藩の初代藩主夫人となっ
た初は、徳川秀忠と江の4女、初
姫、2代目小浜藩主、忠高の異母弟、
高政などの養育に尽力します。初は、
子宝には恵まれませんでしたが、そ
の分、身内の子に精一杯の愛情を捧
げていたのです。

慶長14 (1609) 年、高次の没
後、初は常高院と称し、若狭に寺院
 (常高寺) を建立する意思を固めま
す。しかし、夫の菩提を弔う穏やか
な日々は続かず、大坂冬の陣、夏の
陣が勃発。初は、家康の命により豊
臣家と徳川家の仲介をしますが、姉
の淀殿をはじめ、多くの親族を失い
ます。失意の初は、若狭へ戻り、し
ばらく小浜城の西の丸の屋敷で暮ら
しました。

晩年は、江戸に住みながら常高寺
の建立を進め、亡くなる3年前の寛
永7 (1630) 年、念願の本堂が
完成します。小浜の町と海が見渡せ
る一等地に建立され、初の「たとえ
国替えがあっても寺が続くようにお
心添えをいただきたい。」との遺言
どおり、常高寺は当時から変わらず

この地に残っています。

心の平安を取り戻すため暮らした
地、小浜。裏山には、7人の侍女た
ちに囲まれた初の墓碑があり、今で
も小浜の行く末を静かに見守ってい
るのです。

関連史料・ゆかりの地

臨濟宗妙心寺派 常高寺



常高寺



常高院墓塔

初 (常高院) の発願により、寛永7 (1630) 年に小浜出身の槐堂周虎禅師を迎えて
開山。常高院の肖像画や墓所のほか、狩野派の名手、狩野美信筆の書院壁画等が
往時の盛運を偲ばせています。

【住所】小浜市小浜浅間1 (JR小浜駅より徒歩 20分)

福井藩を襲った

お市の祟り!?

（呪われた松平忠直と光道）

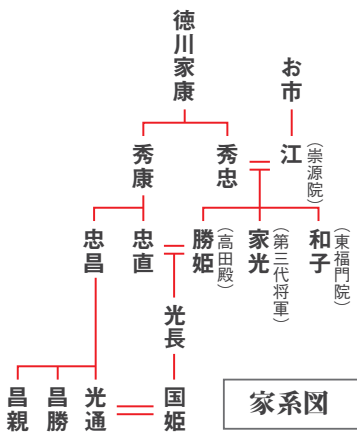


柴 田勝家と妻、お市が自刃して果てた地、北庄（現在の福井市）。お市は、敵将、豊臣秀吉と徳川家康に対して「死んでもこの恨みは忘れない」と呪ったといひます（松平春嶽著「眞雪草子」）。その呪いが、その後福井藩主となった家康の孫、松平忠直や曾孫の松平光通の不幸な結末を引き起こしたとのおわさが福井城下で流布していたといひます。その理由は何だったのでしょうか。

北庄落城の際、お市の娘、茶々、初、江は敵将、秀吉に託され城を出しました。その後、茶々は秀吉の妻となり、初は若狭小浜藩主、京極高次に嫁ぎます。そして、江は第2代将

軍、徳川秀忠の正室に迎えられ、二男五女をもうけました。その江の三女、勝姫は、第2代福井藩主、忠直の正室として、母の悲しい思い出の地、北庄に興入れしたのです。

慶長16（1611）年、忠直17歳、



勝姫11歳、総勢4千人もの従者を伴う豪華な輿入れでした。しかし、三人の子をもうけた後、夫婦仲は悪化。忠直は、勝姫の父である將軍、秀忠の機嫌を損ね、元和9（1623）年、豊後（大分県）に流されます。その後、忠直の弟、松平忠昌が北庄を拝領しました。

さらに、明暦元（1655）年、忠昌の嫡男、光通は、従兄である松平光長の娘、国姫を正室に迎えました。光通と国姫の祖母、勝姫との関係がうまくいかず、国姫は板挟みを苦に自殺します。光通も後を追うように自刃したのです。

北庄を舞台にした忠直の左遷と光通の自殺。この一連の凶事にはある共通点があります。それは、勝姫が陰で関わっていることです。勝姫は非常にプライドが高く、しかも執念深かったといひます。勝姫は、忠直の行動を、父、秀忠に事実を歪曲し告げ口していました。また、わが子光長に越前国が与えられなかったことを根に持ち、同国を継承した忠昌とその子、光通との関係を悪化させました。彼女の頑迷さが、忠直を狂わせ、光通と国姫を死に追いやったのかもしれない。

お市の三女、江（崇源院）と孫の

勝姫（天崇院）の名前をみると、二人の院号には「崇」の字が含まれています。当時の人々は、「崇」を持つ二人に「お市の祟り」が現れたと信じたといひます。しかし、「崇（あがめるの意）」は「崇（たたりの意）」と字は似ていますが、意味が全く異なります。当時の人々はそれを知ってか知らずか、言い伝えていったのです。歴史は史料の解釈で語られることが多いですが、時には、想像や勘違いから語られることもあるのかもしれない。

関連史料・ゆかりの地

福井城下眺望図



（福井市立郷土歴史博物館蔵）

寛政年間（1789～1801）頃の福井城下の様子を描いた眺望図。季節は春で足羽河原の桃林ではいっせいに開花を迎えています。福井城を取り囲む武家屋敷、北陸道に沿って西側から北側に広がる町屋や寺社が一望され、当時の風景を知ることができます。

参考資料等

松原信之編『福井県の不思議事典』新人物往来社、吉川博和『忠直に迫る 越前宰相の狂気と正気』創文堂印刷
ふくい女性の歴史編さん委員会編『ふくい女性の歴史』福井県

越前大野城を 築いた金森長近と

「亀山」の由来



金森長近肖像（素玄寺蔵）

金 森長近は、戦国時代から江戸時代にかけて織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三英傑に任せ、桶狭間の戦いや長篠の戦い、関ヶ原の



越前大野城 絵図
(名古屋市蓬左文庫蔵)

戦いなど数々の戦に参戦し、勝ち残っていった数少ない戦国武将です。今から約440年前の天正年間（1573～1592）に越前大野城を築き、亀山の東側に現在の大野市街地のもととなる城下町を整備しました。

長近は大永4（1524）年、金森定近の次男として美濃国土岐郡多治見郷（現在の岐阜県多治見市）に生まれ、近江国野洲郡金森（現在の滋賀県守山市）で育ったといわれています。弟には落語の祖と呼ばれる『醒睡笑』を編した安楽庵策伝がいます。

ます。長近はもとほ可近ありちかといい、18歳で信長に任せ、尾張国（現在の愛知県）の各地を転戦。桶狭間の戦いなどでの功績を認められ、信長の「長」をもらって長近と名乗るようになり、信長の親衛隊・赤母衣衆あかぼろしゅうの一人として活躍しました。

長近は越前大野城を築城しています。この城は盆地内の独立した小丘陵の亀山の山頂に本丸を配し、その東麓に二の丸、三の丸を配していました。亀山という地名は、山の形が亀に似ているためといわれていますが、実は、京都にある地名にちなんで長近が名付けたという説もあります。京都の小倉山の中にある亀山という地名で、今も亀山公園（嵐山公園）があります。

戦で命をかけて戦ったこの時代の武将は、縁起の良いものを好みました。長近が特に好んだのは金色の龍、「金龍」です。長近が使ったといわれている兜の前立ての飾りには金の龍が付けられています。また、慶長2（1597）年には、長近は京都で「金龍院」という寺院を建立しています。

長近が好んでいたものがもう一つあります。それが「亀」です。戦場で着用する陣羽織の背中には亀の文様を入れていました。「鶴は千年、

亀は万年」といわれるように、亀は縁起のよい動物として当時から好まれていたのです。

長近は大野以外に高山（岐阜県高山市）と上有知（岐阜県美濃市）で城下町を整備しています。上有知にある小倉山は、元は尾崎丸山という名前でしたが、長近がこの地に入った時に京都の嵐山にある小倉山にちなんで名付けたといわれています。

長近は、縁起のよい亀と大好きな地名にちなんで、越前大野城築城の際に「亀山」という地名を考えたのかもしれない。

関連史料・ゆかりの地

越前大野城



大野盆地にある標高約249メートルの亀山に築かれた平山城です。天正4（1576）年頃、金森長近が城郭を築き始め、約5年の歳月をかけて築城されました。土台となる石垣は自然石をそのまま積み上げる野面積みという工法で作られています。現在の天守は昭和43（1968）年に再建されたもので、内部には歴代城主の遺品が数多く展示されています。

【住所】大野市城町3-109（JR 越前大野駅より天守閣まで徒歩約40分）

参考資料等

大野市教育委員会編『大野のあゆみ改訂版』大野市、『大野市史』大野市
河原哲郎『歴史と史跡大野』大野市

執筆・協力

大野市商工観光振興課

敦賀城主、 大谷吉継が見た 敦賀湊の繁栄



大谷吉継像
(みなとつるが
山車会館)

豊臣秀吉に仕えた戦国武将の一人に、敦賀の領主となった大谷吉継がいます。秀吉が長浜を治めていた頃に出仕するようになったといわれる子飼いの武将で、やがて頭角を現して秀吉の五奉行に次ぐ地位を担うまでになった人物です。

吉継は、秀吉の没後、徳川家康と戦った関ヶ原の戦いで石田三成率いる西軍に与し、敗れて自刃したことで知られています。これは一説に三成との友情に殉じて敢えて負け戦に臨んだ、あるいは秀吉の恩顧に報いるため忠義を尽くしたと語られてき



関ヶ原合戦図屏風(右隻)(敦賀市立博物館蔵)

ました。一方で吉継は家康とも親交が深く、徳川との対決をどこまで意図していたか定かではありません。しかし、西軍勝利のための策を充分に練って戦に臨んでおり、最初から負けるつもりではなかったと考えられます。感情的に敗北を選んだとすることは決して正しい吉継評価とは言えないかもしれません。

さて、吉継は秀吉の下で多くの戦に加わり、また、太閤検地などにも関わっていたことから、領主として敦賀に滞在した時間はさほど長くなかったと考えられますが、現在の敦賀西小学校周辺を占めていた敦賀城から、旧笙ノ川を挟んで旧来より繁栄してきた敦賀湊と向き合った時、吉継にはどんな町づくりのビジョンが浮かんでいたのでしょうか。

戦乱に満ちた時代は終息に向かい、敦賀湊には北陸・東北から米や木材などが大量に荷揚げされました。これらは京都や大坂に運ばれていきます。敦賀は物資輸送の日本海側最大の拠点だったのです。吉継が城の拡張や町の整備に関わったことを具体的に示す資料はわずかですが、この時代、敦賀湊が近世の湊街へと変貌していったことは十分に想像できます。

吉継の記録も決して多くはありませんが、治世者としての吉継の能力を示すものはその後の敦賀の町の歴史そのものかもしれません。近世初頭の敦賀湊は大名勢力と強く結びつきを持った豪商たちが活躍し、長い歴史の中でも空前の繁栄を遂げています。そして、その時代の富や文化の蓄積がその後の敦賀を支えているのです。

関連史料・ゆかりの地

敦賀城の跡・
敦賀町奉行所の跡・
敦賀県庁の跡碑



現在の敦賀西小学校の隅に立つ記念碑です。この地は大谷吉継の前の領主蜂屋頼隆の時代に敦賀城が築かれて以降、その破却後も小浜藩の代官所、明治時代には県庁・裁判所など公的な施設が置かれました。

【住所】敦賀市結城町8-6 (JR敦賀駅より車で約7分)

「米五郎左」

若狭の戦国に 幕を下ろす



丹羽長秀肖像（模写）
（東京大学史料編纂所蔵）

丹羽長秀は尾張（現在の愛知県西部）出身の戦国武将です。同じく尾張出身の武将・織田信長に比べ、各地を転戦して回りました。後に「米五郎左」と呼ばれていたとも伝わっています。これは、米が生活に欠かせないのと同じように、織田家には長秀（＝五郎左衛門）が欠かせないという例えで、長秀が重臣としてなくてはならない存在であったことを表したものとされています。

さて、長秀というと近江佐和山城（現在の滋賀県彦根市）や越前北庄城の城主という印象が強いです

終わらせた人物ともいえます。

長秀が若狭と関係を持ち始めたのは、永禄12（1569）年のことです。当時、若狭国守護であった武田元明は、朝倉氏に従って越前へと移りました。この時、残った武田氏の家臣達に一致団結するように促した文書が小浜市内に残されています。一時は信長方と朝倉方に分裂していた家臣達も、最終的には信長方に味方することとなりました。

天正元（1573）年、朝倉氏の滅亡後、長秀は信長から若狭の支配を任せられ、武田氏や逸見氏、粟屋氏といった「若狭衆」を軍事的に指揮します。とはいえ、当時はまだ武田氏の旧臣たちが独自の所領を持っており、長秀は遠敷郡を中心にしてその権限を發揮していたようです。こうした旧臣をまとめる役割を期待されていたのかもしれませんが。

天正10（1582）年に信長が本能寺で討たれると、長秀は羽柴（豊臣）秀吉側に立って山崎の合戦に参加します。その後の清州会議では若狭一国と近江国滋賀郡・高島郡を領することになり、長秀は坂本城（現在の滋賀県大津市）へと拠点を移します。さらに翌年の賤ヶ岳の戦いで功績を挙げた長秀は越前国と加賀半国も拝領し、越前・北庄に入部します。

長秀は北庄で生涯を終えます。存命中はあまり若狭に滞在しなかったようですが、最後まで領国とし続けました。戦国時代末期、武田氏の衰退や朝倉氏の侵入によって動揺していた若狭をまとめあげた長秀は、この地域において戦国時代と江戸時代を「つなぐ」重要な役割を果たしたともいえるでしょう。まさに「米」のような、なくてはならない存在だったのです。

関連史料・ゆかりの地

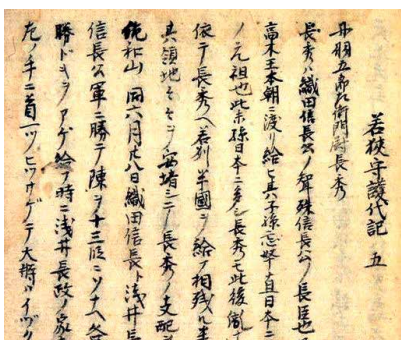
若狭各地に残された古文書



長秀も署名した永禄12（1569）年発給の奉行人連署奉書（神明神社文書）

丹羽長秀や長秀を含む信長奉行人によって作成された古文書が若狭地域に残されています。内容は、禁止事項を定めた禁制や領地を保障する安堵状が中心で、若狭において長秀が権利を保障できる存在であったことがわかります。

が、若狭とも深い関係があります。それどころか、若狭国守護武田氏が衰退した後の若狭を引き継いで紛争を裁定するなど、若狭の戦国時代を



長秀の事績を伝える『若狭守護代記』
（福井県文書館所蔵）

暦こよみの全国統一も

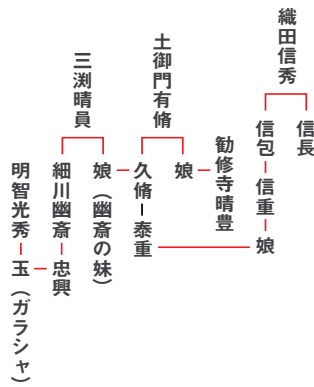
ついでに本能寺の変

織田信長と明智光秀と土御門家



陰 陽師安倍晴明の末裔、土御門家。土御門家は応仁の乱を避けて領地である名田庄納田終に移住し、有宣・有春・有脩の三代にわたり居住しました。実は、この有脩の子、久脩と久脩の嫡子、泰重は、織田信長や明智光秀と縁戚関係にありました。泰重の妻は信長の甥の娘であり、久脩の妻（泰重の母）は光秀の娘の舅である細川幽斎の妹だったのです。さらには、本能寺の変が起る直前に土御門家と信長は関わりを持っていました。

土御門家姻戚関係系図



土御門家は、室町時代後期に名田庄（現在の太田郡おおい町）で暦の製作や天体観測に携わっていました。戦国時代の暦は京暦が広く使用

されていましたが、東国では三島暦が使用されていました。尾張の暦師が三島暦を使用するよう信長に要望したので天正10（1582）年1月29日、安土城において信長立会いのもと久脩らと尾張の暦師との間で京暦と三島暦のどちらが正しいか論争が

行われます。しかし、結論は出ませんでした。信長は2月にも久脩らに再検討を命じ、京暦が正しいとの結論を得て信長に報告します。二つの暦は閏月の取扱いに違いがあり、三島暦では天正10年12月の後に閏12月を入れるのに対し、京暦では翌天正11年1月の後に閏1月を入れていました。閏月をどこに入れるかで正月が1か月ずれることになり、これは人々の生活に大きな影響を及ぼす問題だったのです。

天正10年6月1日、信長は本能寺

において、関白、近衛前久や久脩らと歓談し、閏月を当年に入れるよう

（三島暦を採用するよう）申し入れます。同席していた勤修寺晴豊は日記の中で、「これ信長、無理なることなり」と困惑しています。年も半ばを過ぎ、今さら当年に閏月を入れることは無理なことだったのです。

暦についての信長の考えは記録に残っていませんが、暦に関心を寄せていたことは間違いなく、全国を統一し暦も統一しようとしていたのかもしれない。しかし、翌末明、本能寺の変が起り、信長の全国統一の夢はついでに消滅します。久脩はその直前に本能寺に滞在し、信長と時をともした人物だったのです。

慶長5（1600）年、久脩と泰

関連史料・ゆかりの地

土御門家墓所

重は徳川家康の命により京都に戻ります。その後、寛永2（1625）年7月、泰重は名田庄に里帰りし、京都への帰途には幼少期に過ごしたことのある丹後国田辺（現在の京都府舞鶴市）を訪れています。泰重の妻の親戚である信長を討ったのは、母の親戚である光秀。母の実家があつた丹後国を訪れた泰重は心中複雑な気持ちであったことでしょう。



おおい町暦会館



おおい町名田庄納田終地区には、おおい町暦会館があり、土御門家ゆかりの資料や各地の暦を展示しています。近くには土御門家三代にわたる墓所の他、加茂神社、陰陽道の祭祀場である天壇などがあります。

【住所】 おおい町暦会館：太田郡おおい町名田庄納田終111-7
 (JR 小浜駅より大和交通流星バスで「ホテル流星館」下車徒歩1分)

参考資料等

吉田兼見『兼見脚記（史料集纂 古記録編）』八木書店、勤修寺晴豊『晴豊記』『続史料大成 第9巻』臨川書店
 岩沢愿彦『本能寺の変拾遺—『日々記』所収『天正十年夏記』について—』藤木久志編『織田政権の研究』吉川弘文館
 土御門泰重『泰重脚記』続群書類従完成会

執筆・協力

おおい町暦会館

北陸唯一の現存天守 丸岡城の 当時の姿とは



丸岡城天守

全国でも例のない石瓦で葺かれています。天守台は加工の少ない自然石を使う野面積みで、木造部分は2重3階建てで1階と2、3階の間に通し柱を持たない構造です。小ぶりながら簡素で無骨な印象を与える天守ですが、地元では親しみを込めて「お天守」と呼ばれています。

そんな丸岡城天守ですが、近年その文化財的価値を再検証するための調査が行われています。調査の過程で発見された戦前の解体修理工事の際に撮影された写真や修理記録、自然科学的な調査や他の天守との比較検討を通じて、丸岡城天守のイメージが大きく変わるうとしています。

戦前の修理工事の写真や記録から、特徴である石瓦と3階の廻り縁が後の改造だということがわかりました。また、現在素木の懸魚は漆塗り、銅板張の鯨はもともと金箔押しという華やかさを持っていたこともわかりました。さらに、丸岡城天守の特徴の一つとして、柱の根元を地中に埋める掘立柱という、天守では特殊な構造が知られていました。当初は掘立柱ではなかった可能性が指摘されています。

方から持ち込まれていることもわかってきました。

一見小ぶり
で質素な丸岡
城。今回の調
査で従来とは
異なる新しい姿が少しずつ明らかになつてきました。無骨なイメージで語られる丸岡城から一変し、実際は御殿風の華やかな姿であった可能性があるので。今後も調査を続けていけば、丸岡城のイメージが更に変わっていくのかもしれない。



復元想像図

関連史料・ゆかりの地

丸岡歴史民俗資料館



丸岡城築城400年を記念して、昭和53(1978)年に旧城郭内に開館した丸岡歴史民俗資料館。丸岡藩の歴史や丸岡の民族芸能をわかりやすく展示しています。

【住所】 坂井市丸岡町霞 4-12
(JR 福井駅から本丸岡行きバス「丸岡城」下車すぐ)

戦 国時代から江戸時代にかけて、全国各地に数多くの城が建てられていますが、そんな中で、現在も天守が残っている城郭は全国でわずかに12か所。丸岡城は北陸地方で天守が現存している唯一の城です。

丸岡城は天正4(1576)年に柴田勝豊によって築城され、青山宗勝、今村盛次らの後に本多成重が入城。その後、有馬家が入封し明治維新を迎えます。明治以降、敷地や建物は除却され、天守も一時民有となりましたが、有志により町に寄付され、公会堂として活用されていま



石瓦の屋根

した。しかし昭和23(1948)年6月28日の福井地震によって倒壊。その後の修理工事を経て現在に至っています。

丸岡城天守は独立式望楼型に分類される天守(古い種類の天守)で、

せいさん 凄惨な一揆弾圧を 伝える瓦

（小丸城跡出土の文字丸瓦と府中三人衆）



昭 和7（1932）年、工事の
ため小丸城跡（越前市五分市
町）の乾槽を掘削したところ、多数
の瓦とともに文字が刻まれた丸瓦2
個が発見されました。窺書きで刻ま
れたその文字によって、文献史料に
は記されなかった一揆の存在と前田
利家による弾圧の様子が明らかに
なったのです。

発見された丸瓦の一つには「此の



文字丸瓦（味真野史跡保存会所蔵／
越前市指定文化財）

書物後世に御らん（覽）じられ、御
物かた（語）り有るべく候、然れば
五月廿四日いき（一揆）おこり、其
のまま前田又左衛門（利家）殿、い
き千人ばかりいけとり（生捕）させ
られ候也、御せいはい（成敗）はり
つけ、かま（釜）にい（煎）られ、
あぶられ候哉、此の如く候て、一ふ
て（筆）書とと（留）め候、とあ
り、5月24日に一揆が起こり、利家
が一揆衆を千人ばかり生け捕ったう
えて、磔や釜煎で処刑したという、
利家による苛烈を極める一揆弾圧の
様子が記されています。文頭の「後
世に御らん（覽）じられ、御物かた
（語）り有るべく候」の文言からは、
当時の人々がこの事件から受けた衝
撃の大きさが伝わってきます。



小丸城跡
（越前市五分市町／福井県指定文化財）

利家は、不破光治や佐々成政と
もに、越前の一向一揆を制圧した
織田信長から府中周辺の2郡を与
えられます。利家は府中城（現在
の越前市役所付近に比定）、光治は
龍門寺城（越前市本町の龍門寺を
含む一帯）、そして成政は小丸城を
拠点としたとされます。一般に府
中三人衆と呼ばれる彼らは、天正
3（1575）年10月に宝円寺（越
前市高瀬一丁目）の寺敷安堵や大滝
神郷紙座の営業圏の確定などを3人
連名で行っており、遅くともこの頃
には彼らによる支配が始まっていた
と思われる。しかし、その支配
はあまり長くなく、利家は天正9
（1581）年に信長より能登1国
4郡を与えられ、成政も同年2月頃
までに越中に移封されたと考えられ
ています。（不破光治については不

明）
彼ら戦国武将が当地を去って
400年以上の歳月が流れました。
凄惨な歴史を語る文字丸瓦が出土し
た小丸城跡は、本丸跡や土塁跡など
が部分的に残されており、春は桜、
秋は紅葉に美しく彩られ、訪れる人
を楽しませていきます。



龍門寺城跡
（越前市本町／越前市指定文化財）

関連史料・ゆかりの地

小丸城跡



織田信長の家臣で府中三人衆の一人である佐々成政が築いた
平城。現在は約50メートル四方に本丸跡などの遺構が残る
のみですが、関連する遺構は、東西約300メートル、南北約
450メートルの広い範囲に及んでいます。小丸城跡から出土
した文字瓦は付近の万葉館で展示されています。

【住所】越前市五分市町28（武生ICから車で5分）

賤ヶ岳の戦いで 勝家が本陣を置いた 幻の玄蕃尾城

天正11（1583）年、織田信長がたおれた後の天下の覇権を賭けて羽柴秀吉と柴田勝家が激突した賤ヶ岳の戦いで、勝家の本陣となった玄蕃尾城（内中尾山城）。越前、敦賀と近江柳ヶ瀬との国



玄蕃尾城跡

境、内中尾山山上にあり、湖北から北庄に向う北国街道と、それより分岐して敦賀津へ向う刀根越の道を同時に抑える位置にありました。玄蕃尾城は、天正10（1582）年6月の本能寺の変後、勝家が秀吉との戦いに備えて築城したといわれていますが、それ以前、北国街道を整備した天正6（1578）年頃に、越前衆を動員して築いたとする見解もあります。また、地元の刀根区には玄蕃尾城の築城に当たって寺のお堂の木材を提供したという伝承も残っています。

ところで、史料には「玄蕃尾城」という名はどこにも出てきません。『近江国輿地志略』に「中打尾山

：（略）…柴田勝家陣取の処也、此処より行市峯迄一里半、幅三間の作道也」とあり、この幅三間の作道について、刀根区では「玄蕃尾城の南方の行市山岩に布陣した勝家配下の佐久間玄蕃盛政が、勝家本陣との連絡のため馬で駆け抜けられるよう開いた尾根道である」と言い伝えられています。この尾根道を玄蕃ヶ尾と呼び、転じて本陣の城の名を指すようになったのが、玄蕃尾城の由来であると伝わっています。

玄蕃尾城は、勝家撤退後手つかずのまま残されていたことから、山城の構造が合戦当時のままに良好に保存されています。またその構造は、各郭（石垣や堀などで囲まれた区画）の機能分化と配置、馬出（城門を守るためにその前に設ける土塁など）の完成度などから、高度な築城理論で統一された織豊系山城の最高水準を示すものだといわれています。

一方で、その歴史については明確な記録が残っておらず、長らくその位置が不明になっていました。地元の伝承によると、帝国陸軍が陸戦の参考とするため賤ヶ岳の戦いの調査をした際にも、この玄蕃尾城跡は見つからなかったといえます。その後、東愛発小学校に赴任し、後に敦賀市史の編纂にも携わった先生が、刀

根区に残された伝承を頼りに地区の人々と山中を探索し、ようやく発見に至ったのです。雪深い北陸の山中にあつて遺構の残りの大変良い点などあわせて、まさに奇跡の山城なのです。

関連史料・ゆかりの地

刀根区に残る
柳ヶ瀬トンネル・
小刀根トンネル



柳ヶ瀬トンネル（明治17年開通）



小刀根トンネル（明治14年開通・敦賀市指定文化財）

敦賀と近江の峠道は日本海海運と琵琶湖水運を結ぶ重要なルートであり、幾度も戦乱の舞台となりました。明治15（1882）年、日本海側で最初の鉄道が敦賀で開業、やがて滋賀県長浜と結ばれます。最初の鉄道ルートとなった刀根区内には国内でも屈指の古さを誇る鉄道トンネルが残されています。

不屈の精神で

最後には認められた 結城秀康



結城秀康肖像
(運正寺蔵)

福 井城の御本城橋を抜けると、馬にまたがる勇敢な姿の像があります。福井藩祖・結城秀康の石像です。徳川家康の次男として生まれた彼は、その武勇を轟かせ、後に福井城（当時は北庄城）を築き上げました。しかし、その功績は家康の実子という立場で成し得たものではありませんでした。

秀康は、天正2（1574）年、浜松庄宇布見村（現在の静岡県浜松市）で徳川家康とその侍女・お万のもとに生まれます。侍女の懐妊の知らせに、家康は正室（築山殿）の怒

りを恐れ、お万を家臣の本多重次に預け、お万は密かに秀康を生んだとされています。秀康は家康から憚られ、小牧・長久手の戦いの後には、秀康は人質として豊臣秀吉のもとへ送られました。またその6年後には結城家に婿養子に出されるなど、政略に翻弄される不遇な少年時代を過ごしていました。

このように政略に振り回された秀康ですが、猛々しい徳川の血が腐ることはありませんでした。慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いでは、会津の上杉景勝の抑えとして宇

都宮城を任せられます。景勝が大軍を率いて出陣してくるといふ噂が流れた際、秀康は「上方で石田三成が乱を起し留守番としてここにいるが、退屈だ。そこで一つ合戦をしないか。我らが攻め入るか、逆にこちらへ出馬するか、返事通りにする」と景勝へ一筆したためます。それに対して景勝は「主人のいない留守へ合戦を仕掛けるようなことはしない」と返答。噂は収まり、人々は秀康の知勇を賞賛して伝えました。結果、戦いは行われず、家康は上杉景勝を抑えた秀康の功績を認め、慶長6（1601）年、秀康に越前68万石を与えました。幼少期には家康から憚られていた秀康が、自らの知勇により、ついに父・家康に認められたのです。

また、秀康は家臣からも認められた人物であったことを伝えるエピソードがあります。ある日、家康が次の後継者は誰がいいかと重臣に問うと、大久保忠隣は秀忠を推します。が、老中・本多正信は「三河殿（結城秀康）は武勇は絶倫で智謀も淵深である」として秀康を推しました。このとき、徳川四天王の一人・本多忠勝と、正信の子・本多正純も秀康を支持したと伝わっています。武芸に秀でた忠勝、智略に秀でた正信と正純が推した秀康は、まさに文武両

道の人物として周囲にも認められていたことがうかがえます。

越前封入後、秀康は北庄城の改築という大事業を成し遂げましたが、慶長12（1607）年、病に倒れ34歳の若さでその生涯を閉じました。不遇な時代を過ごしながらも、不屈の信念で最後には一国の礎を築き上げた秀康。彼の生き様は後世に語り継がれ、現在の福井の人々にも顕彰されています。

関連史料・ゆかりの地

福の井



「福の井」は結城秀康による北庄城築城当時からあった井戸と考えられています。安永4（1775）年の「御城下絵図」の天守台には「福井」と記された井戸が描かれています。この頃には一般に「福の井」と呼ばれ、福井城の特別な井戸となっていたことがうかがえます。

【住所】福井市大手3丁目17-1（JR福井駅より徒歩約5分）

まつだいらただなお

松平忠直は

本当に「暴君」

だったのか



松平忠直肖像（浄土寺蔵 画像提供：大分市歴史資料館）

福井藩祖・結城秀康の子で、大坂夏の陣では真田信繁の軍を打ち破ったことで知られる松平忠直。武勇に秀でた忠直ですが、一方で、「暴君」としての逸話も伝えられています。彼は本当に「暴君」だったのでしょうか。

文禄4（1595）年、松平忠直は摂州国（現在の大阪府）で結城秀康の長男として誕生しました。父に連れられて後の二代将軍・徳川秀忠を訪ねた際、秀忠は忠直（当時は長吉丸）を気に入り、忠直はその後しばらく秀忠のもとで過ごしています

た。慶長12（1607）年に秀康が病死すると、越前国68万石を相続し、13歳で二代目福井藩主となります。忠直は生来、武勇に優れていますが、その度胸もまた並ならぬものだったと伝わっています。慶長20（1615）年の大坂夏の陣で、忠直の軍は真田軍攻略を命じられます。兵士たちが怖気づく中、忠直は立ったまま湯漬飯を食べ、「ます、腹いっぱい食べることだ。そうすれば、地獄に落ちてでも、一番つらいと言われている餓鬼道には陥らずに済むからな」と諭し、その平然とした態度に兵士たちも落ち着きを取り戻

したといえます。その後、忠直の軍は見事、真田軍を討ち破るという大功をたて、また、大坂城一番乗りを果たすなど、諸大名の中でもその活躍は抜きんできていました。

徳川家康も忠直の活躍を絶賛。恩賞が期待されました。しかし、領地の加増などもなく「参議従三位」という位を授かるだけで、忠直は不満を募らせます。その後、忠直は次第に酒色にふけり、妊婦の腹を裂くといった乱行に及んだともいわれ、また、参勤の途中に無断で国許へ帰るなどしたと伝承され、「暴君」として知られることになったといわれています。

そんな「暴君」としてのエピソードが伝わる忠直ですが、一方で、彼は現在にも残る大きな功績を残しています。父秀康から引き継いだ鳥羽野（現在の鯖江市）の開拓です。当時、鳥羽野は原野に近い状態の木々が立ち込み、昼でも薄暗く、人々からも恐れられていました。これに対し忠直は、ここに新たに家作する者に屋敷地を無償で与え、租税や使役を免除。この大胆な施策に人々は入植をはじめ、一帯には250軒ほどの民家や商家が建ち並んだといえます。元和9（1623）年、忠直が隠居の身となり豊後（大分県）へ

の配流が決まった時には、鳥羽野の人々は忠直への恩義に報いるべく、一致団結して現在の長久寺（鯖江市）の本堂をわずか二十数日で建立。忠直は、豊後へ向かう際、寺に立ち寄り「ここを在所（生まれ故郷）とする」と宣言し、さらに「住職が托鉢に回ったら協力してほしい」と言い残し、鳥羽野を思う忠直の思いに人々は感動したと伝わっています。

「暴君」としての逸話が残っていますが、これらは創作だったのではないかとの見解も広がっています。彼は果たして本当に「暴君」だったのでしょうか。鳥羽野を開き、その土地を思う姿はまさに「名君」だったのではないのでしょうか。

関連史料・ゆかりの地

忠直卿御墓所



やまもりすけざえもんまつだいらただなお
鳥羽野の山森助左衛門は松平忠直の死の知らせを聞き、九州の廟所から土を持ち帰り、長久寺内に墓を建てました。現在は、鯖江市の指定文化財となっています。

【住所】鯖江市神明町4-1-7（福井鉄道鳥羽中駅より徒歩3分）

徳川家康を支えた

鬼の作左衛門と

福井の関わり



本田重次肖像
(国立歴史民族博物館蔵)

天 下人、徳川家康の三河時代を支えた家臣の一人に、鬼作左の異名を持つ本多重次がいます。

本多重次（通称、作左衛門）は、徳川家に家康の祖父の代から歴任し、奉行人として、財政・民政・司法に携わりました。重次と徳川四天王の一人、本多忠勝は、忠勝の5代前の本多定助を祖とし2つの家系に別れた一族であることでも知られています。

重次は、福井藩初代藩主、結城秀康と深い関係があります。家康の正室に仕える奥女中が家康の子ども

を身籠った際、正室の目を恐れた家康の命を受け、その子（於義丸。後の結城秀康）を引き取って育てたのが重次でした。重次は、秀康を徳川家随一の武将とするため、文武両面で懇切に指導しました。（二人の関係を象徴する小像が福井市立郷土歴史博物館に寄託されています。重次が幼少の秀康を抱えた姿で、松平春嶽が、秀康が葬られた孝顕寺に安置されていた木像を模して铸造したといわれています。）

慶長5（1600）年、秀康は関ヶ原の戦いで活躍。その功績により、福井に68万石を与えられます。秀康

の福井入りに伴い、重次の甥、本多富正が付家老として府中城主（現在の越前市）となっています。

もう一つ、重次は福井と深い関わりがあります。それは、丸岡藩初代藩主、本多成重との関係です。秀康の死後、越前騒動で家老の今村盛次（丸岡城主）が失脚。これを受け、慶長18（1613）年、付家老として丸岡城（坂井市）に入城したのが重次の息子、成重でした。成重の入城には、こんなエピソードが残っています。本多富正は、「越前は大國にして肝要の地。誰かもう一人家臣を遣わしてほしい」旨を願い、従兄弟で同い年の成重を希望したといいます（「富正公御代々覚書」）。その後、成重と富正、2つの本多家は藩政を主導。そして、寛永元（1624）年、成重は、大名として認められ、丸岡藩が成立しました。

現在、丸岡城の一角には、「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」の銘文の碑が建てられています。これは、重次が妻に送った手紙でした。手紙に登場する「お仙」は、成重（幼名、仙千代）です。そこには、家を守り、家族を愛し、忠義を尽くす思いが簡潔に込められています。

この銘文は、坂井市が全国から一行詩を募集する「日本で一番短い手

紙 一筆啓上賞」創設の契機となりました。平成5年から続く「一筆啓上賞」。重次と福井の関わりは、今も続いています。

関連史料・ゆかりの地

丸岡城



本多成重の居城、丸岡城。天正4（1576）年に柴田勝家の甥、勝豊によって築かれました。2重3階の天守は、現存する十二天守の一つです。日本さくら名所100選にも認定されており、春には、満開の桜が霞ヶ城の別名にふさわしく、古城に美しさをそえます。

【住所】坂井市丸岡町霞町1-59（JR芦原温泉駅より京福バス永平寺行きで20分「丸岡城」下車すぐ）

徳川家康が信頼した

「万端の用人」、 本多富正



本多富正像
(藤垣神社蔵)

関ヶ原の戦いの後、越前の地を治めた福井藩祖、結城秀康、秀康に仕え、家中の万事を司った重臣として「万端の用人」とまで称された人物がいました。府中領主の本多富正です。

本多富正は、元龜3（1572）年、三河国（愛知県）に生まれました。14歳の時より結城秀康に仕え、九州島津征伐、小田原北条征伐など多くの戦いで功績を残します。そして、慶長6（1601）年、秀康の越前封入に伴い府中領主となりました。富正は、現在の越前市役所周辺に館を構え、日野川の治水工事や町

用水・道路の整備、館を中心としたまちづくりなど、優れた内政能力を発揮しました。

慶長20（1615）年、大坂夏の陣が勃発。福井藩は、5月6日の戦いで徳川方の兵に加勢をせず、徳川家康から「昼寝をしていたのか」と叱責されます。翌日、富正は、藩主松平忠直の気持ちを受け、討死する覚悟で、先陣の命を受けていた加賀藩に先駆けて、真田信繁率いる軍勢に攻め入りました。見事、真田軍を撃破した富正は、大坂城内へ突入。堀を登り、「天下一番乗りは、越前

の先手本多富正なり。敵も味方も確かに聞け」と叫んだといいますが（『本多家譜』）。富正は、本丸一番乗りの証拠に、千鳥の屏風、千畳敷の大床張付の絵4枚を持ち帰りました。大坂城一番乗りの偉勲を受け、幕府は、福井藩から独立して大名になることを勧めましたが、富正は「自分は主君・秀康公に終生忠誠を尽くしたい」と断わったといわれています（『本多家譜』）。



千鳥の屏風（右隻）
(藤垣神社蔵・越前市武生公会堂記念館寄託)

本多富正が残した足跡の一つに、依屋宗達による「西行物語絵巻」（重要文化財、出光美術館蔵）の模写本の制作があります。富正が依頼し、鳥丸光廣（公家で、当代一流の文化人）が天皇所持の絵巻を借り出し監修をした世紀の大企画でした。宗達が絵を、能書家として知られた

光廣が詞書を担当して、約10年余の年月と莫大な費用をかけた絵巻の制作。この大事業を光廣に依頼したのは、富正が仕えた結城秀康の未亡人、鶴子が光廣の妻となっていたからといわれています。ここにも、主君への忠義があったのかもしれない。

本多富正は、慶安2（1649）年、78歳で没するまで、忠直、忠昌、光通に至る4代の藩主に仕え、約半世紀にわたり、福井藩を支え続けました。富正が死去したとき、福井藩は「国中、父母を失ったかの如し」であったと言われています。富正は、福井の万事を司っていたまさに「万端の用人」だったのです。

関連史料・ゆかりの地

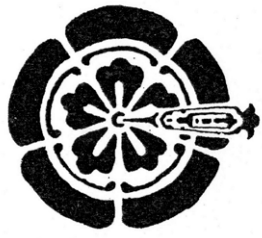


つうげんじやくれい
応安元（1368）年に通幻寂霊によって開かれた寺。府中領主であった本多家の菩提寺であり、本多富正以来歴代の領主とその家族が葬られています。
【住所】越前市深草1丁目10-3（JR武生駅より徒歩15分）

結城秀康に信頼され

加賀藩の抑えとなった 多賀谷左近三経

あ わら市柿原の田園の中にたたずむ「多賀谷左近三経石廟」(あわら市指定文化財)。この石廟の主、多賀谷左近三経のルーツである多賀谷家は常陸国南部、下総国北部(現在の茨城県南部周辺)を地盤とする国衆で、三経はその家の嫡子として天正6(1578)年に生まれていきます。しかし、家の存続のため廃嫡され分家し、結城家の養子となった結城秀康に仕えました。朝鮮



三経系多賀谷家家紋

出兵の際には、肥前国名護屋(現在の佐賀県唐津市)へ出陣し、そこで石田三成を介添えとして元服しました。三成の一字をもらい、三経と名乗ります。同時に左近将監に任官し、以後、多くの資料上では「多賀谷左近大夫」や「多賀谷左近」と記されています。三経とはどのような人物だったのでしょうか。

三経は武勇に優れたほか、蹴鞠を当代一流の飛鳥井雅枝より習得するという風流な一面、豊臣秀吉や徳川家康、秀忠など時の権力者に季節の贈り物を欠かさず送る抜け目なさも持ち合わせるなど、バランスの取れた優秀な人物だったようです。

三経にとつての大きな転機が関ヶ原の戦いでした。この時、三経は結城秀康の先鋒として上杉攻めに下野国大田原(現在の栃木県大田原市)にいち早く布陣し、上杉勢に備えています。この戦機を捉えたすばやい行動に秀康も満足し、褒詞の手紙を与えています。こうした家臣の活躍などもあり、秀康は関ヶ原の戦いの後、越前国68万石を与えられ移封したのです。

三経も常総の地を離れ、越前国へやってきました。慶長6(1601)年には秀康より丸岡領・三国領を中心に3万石が与えられ、柿原村(現在のあわら市柿原)に館を構えます。関ヶ原の戦いの直後でまだ世情が安定していない中、福井藩にとつて最大の任は、加賀前田家に対する備えでした。その福井藩の中でも最北で加賀藩と接する場所に領地を与えられたということは、秀康から相当の信頼を受けていたと言えるでしょう。また、三経が病となった時は秀康から懇ろな見舞いの手紙をもらっています。年齢が近いことなどもあり、個人的にも信頼されていたと推察されます。

地域を治めることにおいては資料がほとんど残っていませんが、あわら市橋屋や樋山にあるため池、滝の「ふたまたつつみ」は三経の時代に作

られたとの伝承があるなど、領国の整備は積極的に行い、その治世は善政だったと人々に記憶されました。

三経は慶長12(1607)年に亡くなり、その治世はわずか6年という短さでした。柿原村の西端に宇墓堂という場所があり、そこに三経の墓が今も残されています。

関連史料・ゆかりの地

多賀谷左近の墓 (あわら市指定文化財・史跡)



史跡・多賀谷左近の墓はあわら市柿原地区の南西の端にあります。笏谷石で作られた多賀谷左近三経石廟(市指定文化財・建造物)、三経の子孫が建てた供養の五輪塔、一族の墓と思われる宝篋印塔があります。
【住所】あわら市柿原 36-40(金津1Cより車で約10分)



多賀谷左近三経蔵骨器
(あわら市郷土歴史資料館蔵)

京極高次、

「鯖街道」 起点の

礎を築く



京極高次肖像
(丸亀市資料館蔵)

平 成27年に日本遺産に認定された「鯖街道」。その起点が、小浜市広峰にある「いづみ町商店街」です。名前にある「いづみ町」(和泉町)とは江戸時代の町名で、現在の商店街がその範囲に当たります。ところが和泉町の北側、ちょうど小浜市今宮の辺りに「上市場」「下市場」という町名があったことは意外と知られていません。

実はこの上市場・下市場には、江戸時代を通じて魚市場が置かれていました。市場での出来事などを記録した『市場仲買文書』(個人蔵)に、この市場は、先の京極高次さまが

一城一城のお城を建てる時、上下市場町や突抜町はもともと芦原や沼だったところを埋め立てて屋敷地にした」という記録が残っています。もともと低湿な土地であったところを開発し、埋め立てた土地には残らず町屋が建ち、市場がつくれたのです。

ここで登場する京極高次は初代小浜藩主となった人物で、「浅井三姉妹」の次女、初(常高院)の夫としても有名です。もともと近江北部を拠点とした高次は織田信長や豊臣秀吉に仕えながら徐々に勢力

を伸ばし、文禄4(1595)年に秀吉から大津6万石を与えられました。

秀吉の没後、関ヶ原の戦いでは東軍(徳川家康)方に付き、大津城で籠城。その功績が家康に認められて若狭8万5千石を拝領しました。後に加増された小浜藩領約11万石は、江戸時代の小浜藩領の基本的な石高として受け継がれています。

高次が若狭を拝領したのは慶長5(1600)年、その翌年からは小浜城の建設を始めます。このとき、城と同時に城下町の整備を行っており、小浜の魚市場もこのときに整備されています。

高次は慶長14(1609)年に亡くなり、家督は子忠高が継ぎますが、寛永11(1634)年に出雲松江への転封を命じられます。その後、若狭には酒井家が入りました。藩主が替わっても市場は魚商売で賑わい、江戸時代を通じて京都へと海産物を供給し続けます。そして現代でも、鯖をはじめとする若狭の魚は京都で重宝されています。

「鯖街道」の言葉は『市場仲買文書』の「生鯖塩して担い京に行き仕る」という一文に由来するともいわれています。城下町小浜とその魚市

場を整備した京極高次は、「鯖街道」の礎を作ったともいえるのです。

関連史料・ゆかりの地

上・下市場町の残影 (小浜市今宮区)

上・下市場町は近代にもその機能を維持し、戦後もしばらくは商店が並んでいたといえます。ところが1980年代に小浜新港(川崎地区)の開発が完了すると、多くの商店は新港へと移転していきました。今や市場の面影はほとんどありませんが、地区の中心に残る市蛭子神社が、市場の守り神としてその名残を伝えていきます。

【住所】小浜市小浜今宮(JR小浜駅より徒歩約10分)



戦前の今宮区(井田家古写真)

現在の今宮区と市蛭子神社



福井県内歴史系博物館等一覧

※入館料および休館日等については各施設までお問い合わせください。

福井県立歴史博物館	福井市大宮2-19-15	0776-22-4675
福井県立美術館	福井市文京3-16-1	0776-25-0452
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	福井市安波賀町4-10	0776-41-2301
福井県立こども歴史文化館	福井市城東1-18-21	0776-21-1500
福井県立図書館	福井市下馬町51-11	0776-33-8860
福井県文書館	福井市下馬町51-11	0776-33-8890
福井県ふるさと文学館	福井市下馬町51-11	0776-33-8866
福井市立郷土歴史博物館	福井市宝永3-12-1	0776-21-0489
福井市グリフィス記念館	福井市中央3-5-4	0776-50-2911
福井市橘曙覧記念文学館	福井市足羽1-6-34	0776-35-1110
福井市愛宕坂茶道美術館	福井市足羽1-8-5	0776-33-3933
大野市歴史博物館	大野市天神町2-4	0779-65-5520
はたや記念館 ゆめおーれ勝山	勝山市昭和町1-7-40	0779-87-1200
勝山城博物館	勝山市平泉寺町平泉寺85-26-1	0779-88-6200
白山平泉寺歴史探遊館まほろば	勝山市平泉寺町平泉寺66-2-12	0779-87-6001
あわら市郷土歴史資料館	あわら市春宮2-14-1	0776-73-5158
藤野巖九郎記念館	あわら市温泉1-203	0776-77-1030
吉崎御坊蓮如上人記念館	あわら市吉崎1-901	0776-75-2200
みくに龍翔館	坂井市三国町緑ヶ丘4-2-1	0776-82-5666
瀧谷寺宝物殿	坂井市三国町滝谷1-7-15	0776-82-0216
坂井市丸岡歴史民俗資料館	坂井市丸岡町霞町4-12	0776-67-0001
福井県教育博物館	坂井市春江町江留上緑8-1	0776-58-2250
鯖江市まなべの館	鯖江市長泉寺町1-9-20	0778-51-5999
越前市武生公会堂記念館	越前市蓬萊町8-8	0778-21-3900
越前和紙の里 紙の文化博物館	越前市新在家町11-12	0778-42-0016
越前町織田文化歴史館	丹生郡越前町織田153-1-8	0778-36-2288
越前古窯博物館	丹生郡越前町小曾原 107-1-169	0778-32-3262
福井県陶芸館	丹生郡越前町小曾原120-61	0778-32-2174
北前船主の館 右近家	南条郡南越前町河野2-15	0778-48-2196
敦賀郷土博物館	敦賀市三島町1 (八幡神社内)	0770-22-1193
敦賀市立博物館	敦賀市相生町7-8	0770-25-7033
美浜町歴史文化館	三方郡美浜町河原市8-8	0770-32-0027
若狭国吉城歴史資料館	三方郡美浜町佐柿25-2	0770-32-0050
福井県立若狭歴史博物館	小浜市遠敷2-104	0770-56-0525
福井県立若狭図書学習センター	小浜市南川町6-11	0770-52-2705
福井県年縞博物館	三方上中郡若狭町鳥浜122-12-1	0770-45-0456
佐久間記念交流会館	三方上中郡若狭町北前川61-2	0770-45-1780
若狭鯖街道熊川宿資料館「宿場館」	三方上中郡若狭町熊川30-4-2	0770-62-0330
若狭町歴史文化館	三方上中郡若狭町市場20-17	0770-62-2711
若州一滴文庫	大飯郡おおい町岡田33-2-1	0770-77-2445
おおい町立郷土史料館	大飯郡おおい町成和2-1-1	0770-77-2820
おおい町暦会館	大飯郡おおい町名田庄納田終111-7	0770-67-2876
高浜町郷土資料館	大飯郡高浜町南団地1-14-1	0770-72-5270

福井の戦国をひも解く

福井の戦国

歴史秘話